

シュメール語の語順に関する一つの仮説

峯 正 志

1 はじめに

シュメール語は、現在のイラクの南部地方で約四千年前に話されていた言語である。楔形文字で粘土板に書かれたため、四千年の年月を経た現在でも、我々は当時と同じ状態で彼らの残した文書を読むことができる。彼らはおびただしい量の粘土板を残しており、それらを分析することで、我々は記録された最古の言語であるシュメール語の構造を知ることができる。

シュメール語研究のレベルは、多くのすぐれた学者が努力した結果、かなりの程度まで高められたといえる。しかし、資料の性格が偏っていること¹⁾、同系の言語が知られていないこと、多くの単語の語義が不明のままであること等のため、ごく基本的な接辞の機能も学者間で意見の一致を見ていないというのが現状である。

このような現状のため、これまでのシュメール語研究は、主に形態統語論的研究に限られていたといえる。シュメール語の語順が日本語のように比較的自由であることも相俟って、語順に関する研究はあまり見られなかった。

ところで、最近の言語学では、語順に関する新しい様々な知見が現われている。そこでそれらを援用することによって、シュメール語における語順研究の基礎を作ってみたいと筆者は考えてきた。

この論文では、まずこれまでのシュメール語における語順研究を概観し、さらに最近の言語学における語順研究に言及し、最後にシュメール語における語順の決定に関わる一つの仮説を提唱する。

2 従来の研究

前節で述べたように、従来の研究において語順に言及された例は少ない。筆者が気が付いたものを挙げて批判してみたい。Falkenstein (1959: p.51ff.) には次のような記述がある。

Die Glieder des nominalen Satzteils, ... (中略) ... werden entsprechend ihrem sachlichen Gewicht angeordnet. Die betonteste Stelle ist der Satzanfang, je weiter ein Glied davon entfernt zu stehen kommt, desto geringer ist der auf ihm liegende Nachdruck. Dieses Stellungsprinzip ergibt die normale Reihenfolge:

Subjekt, richtungsbestimmte Objekte, Akkusativobjekt, Äquativ. Die Stellung der beiden letzten meist unmittelbar vor dem Prädikat hängt mit deren engerer Bindung an dieses zusammen. Wenn aber auf einem Satzglied ein überdurchschnittlicher Nachdruck ruht, rückt dieses nach vorne dem Satzanfang zu. So weisen Königsinschriften, in denen der Herrscher von dem Bau eines Tempels für einen Gott berichtet, stets die Reihenfolge Dativobjekt, Subjekt, Akkusativobjekt auf.

「文の名詞要素は、客観的な重要性に応じて（筆者：文中で）並べられる。最も強調を受ける位置は文頭であり、要素が文頭から離れるほど、強調の度合いは弱くなる。この位置原則のため、通常の語順は、主語—方向指定（筆者：場所）名詞—対格名詞—様格名詞となる。最後の二つがたいてい述語の直前に位置するのは、それらが述語と密接に関係しているからである。文要素に特に強い強調が来るときは、文頭に移動する。それで、支配者が神に神殿の建物について報告する王碑文は、常に、与格名詞、主語、対格名詞という語順を持つ。」

このように長い引用をしたのは、ファルケンシュタインのこの文法の中で語順に言及しているのはこの部分だけだからである。つまりそれだけ語順に対する意識が少ないと言えよう。Falkenstein (1959) の基となった彼の名著、Falkenstein (1978) でも、語順に関する記述は質・量とも上の記述と大差ない。ただ、ここでは彼の提示した「基本語順」から逸脱した用例が、6 ページに渡って種類別に数多く掲載されている。

今度は別の学者の記述を見てみよう。Thomsen (1984: p.51ff.) は比較的新しい文法書であるが、そこには次の記述がある。

“The order of the elements of the nominal chain or the finite verb is fixed. The order of the various nominal chains (ergative, dative, terminative etc.) in the sentence is, however, rather free, but the verb is always at the end of the sentence.”

これ以外の文法書には語順に関する記述はほとんど見られない。このように、語順そのものに対する関心が一般的に低いのである。

この理由はシュメール語の語順が比較的自由であることによる。Thomsen (1984) はそのことに言及しているし、また Falkenstein (1978) に基本語順から「逸脱」した例が非常に多く掲載されているのもつまり語順が自由だからである。また、比較的固定した語順の見られる現象に関しては言及されているということも、間接的にそのことを証明している。例えば、動詞が最後に位置することや、疑問詞が動詞の直前に位置することなどは、比較的安定しているので、他の要素に比べ言及されることが多い。

さて、記述の内容にもいろいろな問題点がある。Thomsen (1984) の記述はほとんど何も言っていないのに等しいので、Falkenstein (1978) の記述について述べると、まず第一に、このような記述をした根拠が何も述べられていない。どのような根拠で、文頭に「強調」が置かれていると判断したのであろうか。

また、文頭に近いほど「強調」の度合いが強くなるといいながら、別の箇所では違うことを言っている。

ibid. p.6

Die Nachstellung besonders betonter Glieder des nominalen Satzteils hinter das Verbum ist in literarischen Texten, die uns in altbabylonischen Abschriften überliefert sind, aber überwiegend aus früherer Zeit stammen, häufig bezeugt. Sie beweist, dass auf dem Satzende ein noch stärkerer Nachdruck liegt als auf dem Satzanfang.

「特に強調された名詞要素を動詞の後に置くことは、古バビロニア版として伝承されているが、実際はもっと古い時期に作られた文学テキストにしばしば見られる。このことは、文頭よりもさらに強い強調が文末に置かれていたことを示している。」

つまり、文頭に近いほど強調の度合いが強くなるといいながら、文末にさらに強い強調が置かれるというのである。

さらに問題となるのは、「強調」という用語でいったい何を指しているのかははっきりしないことである。例えばシュメール語には enclitic copula と呼ばれる -àm という要素があるが、Falkenstein (1959:p. 57ff.) では次のように説明されている。

Durch Abschwächung der ursprünglichen prädikativen Bedeutung hat es sich zu einem Element der Hervorhebung entwickelt, das zu Betonung der verschiedenen nominalen Satzglieder verwandt werden konnte.

「もともとの述語的な意味が弱まって、様々な名詞的文要素の強調に用いることのできる強め要素に発展した。」

つまり、この enclitic copula も「強調」に用いられるというのである。では一体、この「強調」と文頭や文末位置の持つ「強調」とは同じなのか違うのか。

上でファルケンシュタインは、王碑文では与格名詞が「強調」を受けて前置されると書いていたが、それは次に挙げるようなものである。

Urnammu 9 (Kärki 1986)

- | | | |
|--|--------------------------------|------------------------------------|
| 1) ^d nanna
ナンナ神 | 2) lugal-a-ni
彼の王 (間接目的語名詞) | 3) ur- ^d nammu
ウルナンム |
| 4) lugal-uri-ma-ke ₄
ウルの王 (主語名詞) | 5) é-a-ni
彼の神殿 (目的語名詞) | 6) mu-na-dù... (後略)
建てた (定動詞) |

「彼の主人であるナンナ神のために、ウルの王、ウンナンムは、彼の神殿を建てた。」

彼に従えば、-àm の接辞も、この与格の文頭移動も、すべて「強調 (Hervorhebung)」であるということになる。しかし、ファルケンシュタインはそれらが同じ種類のものかどうかについては言及していない。題目構文を持つ我々日本語話者なら、ここで言う「強調」とは、Topic (題目) のことではないかと考えるかも知れない²⁾。すべてを「強調」という言葉で捉えるのは無理なのではないかと思う。そうではなくて、例えば、(仮に)「文頭は『題目』、動詞直前は『焦点』を示す」というように、違う機能を想定したほうが無理がないのではないかと思う。ともあれ、このことは本稿の主題ではない。

このように記述自体にも多くの問題点がある。従って、シュメール語における語順研究は、未だ未開拓の領域であると言ってよいだろう³⁾。しかし、この現状をこれまでの学者達の怠慢とするのは酷である。語順より先に明らかにすべきことがあまりに多く存在したために、手が回らなかったというのが実情であろう。

3 言語類型論の語順研究とシュメール語

この節では、現在の言語学での語順研究と、その成果のシュメール語への適用状況を概観する。

言語学における語順研究は、Greenberg (1963) に始まる言語類型論 (いわゆる語順類型論) によって大きな進歩を見た。そこでは、主語(S)、目的語(O)、動詞(V)という三要素の無標の語順 (基本語順) によって言語を分類し、それぞれのタイプが共通の特徴を見せるということを明らかにしたのである。そして、これらの特徴を分析することによって、言語普遍性を明らかにすることが可能であることがわかり、言語類型論は単なる言語の分類学としてではなく、言語普遍性を探る有力な武器として発展してゆくのである。

この言語類型論 (語順類型論) の観点からシュメール語の語順を簡単に見てみると、次のようになる。まず、基本語順は SOV である。動詞は、トルコ語などと違い必ず文末に位置するが、それ以外の名詞句要素はかなり自由に語順が変わり得る。

Greenberg (1963) の定式どおり、前置詞でなく後置詞を用いるが、名詞修飾要素は名詞に後続する。すなわち、形容詞・属格名詞・関係節のような要素は名詞の後に置かれるので、名詞-形容詞、名詞-属格名詞、名詞-関係節の語順となる。

動詞には多くの接辞が付くが、接頭辞の方が接尾辞よりもはるかに種類も多く、また多く使用される。

このように、シュメール語はOV型言語でありながら、かなりのVO的特徴をも示すのである。

さて、言語類型論もこのようなグリーンバーグ的な語順研究からさらに進み、最近ではTomlin (1986) や Siewierska (1988) に見られるように、どのような原理が語順決定に関わっているのか、についての考察も見られるようになってきた。そこでは、有生性 (Animacy) や定性 (definiteness)、新情報・旧情報などの概念が取り上げられ、考察されている。

シュメール語の語順研究にも、このような観点からのアプローチが望まれる。我々が参考にすべき多くの成果があるように思われるからである。

もっとも、全くそのような研究が無いわけでもない。最近このような観点からの研究も少し見られるようになってきた。例えば、Hayes (1990) の参考書目の中には言語類型論の論文が見られる。Michalowski (1992) にも、ほんの少しではあるが言及されている⁹⁾。また、Hayes (1991) は、シュメール語の語順の問題に言語類型論の成果を取り入れようとした最初の試みの一つである。残念ながら類型論の成果を生かしきってはいないようではあるが⁹⁾、このような試みは続けられるべきであろう。

4 シュメール語の語順決定に関わる一つの仮説

上で見たように、シュメール語の語順研究は、まだ余手が付けられていない領域である。従って、私達はこれからこの分野を進めていかなければならない。この論文では、そのような研究の一步として、ささやかながら一つの仮説を提示してみたい。それは、次のような仮説である。

仮説①：動詞直前の位置は「焦点 (focus)」の位置である。

このような言語としては、トルコ語がある。Kornfilt (1987) には、次の記述が見られる：

“As a matter of fact, Turkish is rather free in its word order. Often (but not always), the divergences from the unmarked order have a pragmatic, discourse-oriented function, in that the position immediately preceding the verb is the focus position... (中略)... New information and material stressed for emphasis appear in focus position and,”

また、日本語もこれに似た特徴を持っていると思われる。例えば次の二文を比べてみればよくわかる。

(1) 私は 昨日 学校に 行きました。

(2) 私は 学校に 昨日 行きました。

(1)は普通の語順である。しかし、(2)は(1)に比べて「昨日」の部分が「強調」されているように感じる。つまり、「他の日ではなく、昨日だ」という言外の意味が込められているのである⁹⁾。

これと同じ規則がシュメール語にも見られるのではないか。これについて筆者は次のような根拠を提示したい。

1) トルコ語と同様、疑問詞が動詞の直前に位置する。

疑問詞疑問文の場合、明らかに焦点は疑問詞にある。Jestin も Falkenstein も、疑問詞が動詞の直前に位置することを意識していながら、その事実が意味することを真剣に考えていなかったように思える。

2) 意味的に重要な要素が、動詞の直前に置かれる傾向がある。

いくつかの動詞において、決まった語順が見られる。例えば、「受け取る」という意味の動詞の場合、少なくとも行政経済文書においては、必ず「受取人」が、動詞の直前の位置を占める。

1) dab_s

Kang (1972) No.38

1) 4 sila_s…

4 匹の小羊を (直接目的語)

3) Ki ab-ba-ša₆/-ga-ta

アッバシャッグから (奪格名詞)

4) in-ta-è/-a

インタエが (主語)

5) i-dab_s

受け取った (定動詞)

2) šu~ti

Kang (1972) No.38

1) 4 udu…

4 匹の羊を (直接目的語)

7) Ki na-lu_s-ta

ナルから (奪格名詞)

8) ur-nigin-gar

ウルニガンガルが (主語)

9) šu ba-ti

受け取った (定動詞)

また、手紙において、「(誰誰に) 告げよ。」という決まり文句があるが、その場合、必ず「～が言ったことを」「～に」「告げよ」となり、いわゆる直接目的語、間接目的語、動詞の順となる。動詞の直前には間接目的語が来るのである。

Sollberger (1966) No.1

- Obv. 1) lugal-e 2) na-ab-bé-a 3) ur^d li₉-si₄-na-ra
王が 言うことを (直接目的語) ウルリシナに (間接目的語)
- 4) ù-na-a-du₁₁
言うように (定動詞)

しかし、「言う」という動詞は必ずこの語順を取るかというと、そうではなく、普通は、間接目的語、直接目的語、動詞の順である。

Falkenstein (1956) No.35

- 7) é-ta-mu-z [u] 8) ur-š_u-ga-lam-ma-r [a]
エタムズは (主語) ウルシュガラソマに (間接目的語)
- 9) gemé-zu nu-me in-na-an- [du₁₁]
「あなたの女奴隷ではない」と (直接目的語) 言った (定動詞)

ibid. No.62

- 9) a-tu-e 10) á-ta má nu-ra-sum
アトゥは (主語) アタに (間接目的語) 「船はあなたにはあげなかった」と
in-na-an-du₁₁
(直接目的語) 言った (定動詞)

上の例では、直接目的語の位置に、「言った」内容が直接話法で置かれている。正確には「直接目的語」とは言えないが、いずれにしても間接目的語が動詞の直前に位置するわけではないことはこれで例証できる。

これらの例において、文書の性格上、動詞の直前に位置する要素は、その文書における、最も重要な要素であることが分かる。すなわち聞き手の知りたい情報、つまり「新情報」であり、もっとも焦点の置きやすい要素であるといえる。

例えば、受け取り記録においては、奪格であらわされる人物は引渡しの責任者であり、同じ人物がさまざまな泥章に繰り返し言及される。しかし主語となる「受取人」は同じ人物というわけではなく、様々な人物が受取人になりうる。従って、このような記録では、誰が受け取ったかという点が重要なのである。

また、手紙文における直接目的語と間接目的語であるが、Sollberger (1966) において、定動詞 ù-na-a-du₁₁ のみられる泥章 339 例のうち、直接目的語が明記されていない例は実に 332 例もある⁷⁾。つまりほとんどの例は間接目的語しか明示していないのである。このことは、間接的ながら、手紙文において間接目的語の方がより重要な要素であることを示していると考えられる。

5 結 論

本稿で述べたことをまとめてみよう。

まず、シュメール語の語順研究がこれまであまり行なわれてこなかったことを指摘した。そして現代の言語学では、言語類型論の発達により語順研究がかなり進んできたことを述べ、これを利用することでシュメール語の語順研究を進めることができる可能性を指摘した。そして、そのような語順研究の一步として、一つの仮説を提案した。その仮説とは「動詞直前の位置は「焦点」の位置である」というものである。そして、それを示唆しているようないくつかの証拠を提示した。

本稿で提案した仮説はまだ十分とは言えず、さらに綿密な検証がなされなければならないけれども、このような観点からの研究が望まれることは明らかであろう。

註

- 1) シュメール人の残した文書の多くは、決まった表現しか現われない行政経済文書である。いわゆる文学テキストは、シュメール語が死語化した後、アッカド語を話す人々によって記録された。
- 2) 「題目」といっても、「それについて述べられるもの」といったような定義のものだけを指すわけではない。「東京は人が多いところだ」のような「題目構文」もあれば「今日は彼が発表する」のような「題目構文」もある。後者は、「今日というものについて言えば、彼が発表するものだ」とは言えないであろう。このような違いをふまえて、Shibatani (1990:p.277) では、“The above discussion points to the conclusion that the so-called topic construction in Japanese is, in fact, of two kinds: one that reflects an experiential judgment, and another that is a stylistic variant of a simple sentence.”としている。
- 3) 語順全体を扱っているわけではないが、峯 (1991) は、ある接尾辞の付加によって起こる語順の変化について論じている。本稿でも述べているが、疑問詞は動詞の直前に位置する。しかし、enclitic copula -am が疑問詞に接辞されると、その疑問詞は文頭に移動する強い傾向があることを明らかにした。
- 4) “The syntax of Sumerian has not been studied in depth. For typological purposes, it should be noted that the head noun of relative clauses can be agent, patient, or oblique. In subordinate clauses, the verb is in final position.”とある。「従属節では」と言っているのは、主節では文末に Falkenstein の指摘したような「強調」された名詞要素が来ることがあるからかも知れない。
- 5) Hayes (1991) では次のような議論を展開している。シュメール語は SOV 言語で

あるから、属格名詞が名詞に後続するのはおかしい。anticipated genitive と呼ばれる名詞に前置される属格がときおり見られるので、それは古い（属格が前置されていた）時代の名残ではないか、というのである。しかし、この論文には根拠が全く示されていない。つまり「言語類型論ではこうだから、シュメール語もこうであるだろう」といっているわけである。これは言語類型論の誤った利用の仕方であると思う。言語類型論での「言語普遍性」は、あくまで仮説なのだから、それをヒントにして、それぞれの言語で実証的に研究すべきであると筆者は考える。

- 6) 同様の指摘は、角田（1991）p.14 にも見られる。
- 7) 直接目的語だけ、すなわち「誰誰が言ったこと」だけ明記されて、間接目的語および定動詞、すなわち「誰誰に伝えよ」が書かれていない手紙も少数ながら存在する。例えば、Sollberger（1966）においては3例ある。

引用文献

- Falkenstein, A (1978) *Grammatik der Sprache Gudeas von Lagaš Vol. 11*. 第2版
Roma.
- _____ (1956) *Die neusumerischen Gerichtsurkunden Vol. II*. München.
- _____ (1959) Das Sumerische. in *Handbuch der Orientalistik*. Leiden.
- Greenberg, J. H. (1963) Some Universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. in Greenberg, J. H. (ed.) (1963) *Universals of Language*. Cambridge, Mass.
- Hayes, J. (1990) *A Manual of Sumerian Grammar and Texts*. Malibu.
- _____ (1991) Some Thoughts on the Sumerian Genitive. *Acta Sumerologica* No.13. p.185~194. Hiroshima.
- Kang, S. T. (1972) *Sumerian economic texts from the Drehem archive. Sumerian and Akkadian cuneiform texts in the collection of the World Heritage Museum of the University of Illinois. Vol. I*. University of Illinois Press. Urbana.
- Kärki, I. (1986) *Die Königsinschriften der dritten Dynastie von Ur*.
- Kornfilt, J. (1987) Turkish and the Turkic Languages. in Comrie, B. (ed.) (1987) *The World's Major Languages*. London & Sydney.
- Michalowski, P. (1992) "Sumerian." in W. Bright (ed.) *International Encyclopedia of Linguistics*. Vol. IV.
- 峯 正志 (1991) 「enclitic copula -àm の接辞されたシュメール語の疑問詞の位置について」『ニダバ』No.20. p.29~37. 広島
- Shibatani, M. (1990) *The languages of Japan*. Cambridge University Press.

Siewierska, A. (1988) *Word Order Rules*. Croom Helm.

Sollberger, E. (1966) *Texts from Cuneiform Sources Vol. I. (The Business and Administrative Correspondence under the Kings of Ur)*. New York.

Thomsen, M. -L. (1984) *The Sumerian Language*. Mesopotamia 10. Copenhagen.

Tomlin, R. S. (1986) *Basic Word Order. Functional Principles*. Croom Helm.

角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版。東京。